

	<h1>日台稲門会</h1>	平成 17 年(2005 年) 民国 94 年 <b>12月20日 発行</b>
	<b>NEWS LETTER 第9号</b>	発行 日台稲門会事務局 編集 白鳥・石川・小野間・齋藤

早いものでもう新年直前、「酉」から「戌」に主役交替ですが、H5N1型鳥インフルエンザは来年が本番という予想もあります。皆様、くれぐれもご用心下さい。日台稲門会ニュースレターをお届けします。

**会長報告**

**）第5回 早稲田大学台湾研究所運営委員会 出席報告**

本年度第2回目の運営委員会は10月28日(金)、台北国賓飯店にて開催されました。  
 出席者は、羅福全委員長(亜東協会会長)、許世楷委員(台北駐日経済文化代表処代表)、李世昌委員(代表処文化部長)、鄭欽仁委員、北村友雄委員(台北稲門会会長)、石田浩委員(台湾学会理事長)、白鳥和夫委員、西川潤所長、江正殷事務局担当。

討議内容:

研究プロジェクトの経過報告

「台湾・日本関係年表1895～1945」の作成を新規プロジェクトに追加する。監修:駒込 武(京都大学教育研究科教授)、吳蜜察(台湾大

学歴史系副教授)。2007年5月完成予定。

羅委員長より、今年度の「日本における台湾研究」シンポジウムの開催に引き続き、来年度も同様なシンポジウムを開催したいとの意向が示された。

本年度、奥島前総長を機構長とするアジア研究機構が設立された。これに伴い、台湾研究所が大学全体のアジア研究の中で、どのように関わっていくかが、今後の検討課題となる。

来年4月の日本における運営委員会開催日時を、日台稲門会総会開催日にあわせるよう台湾研究所事務局に依頼した。

**）「日本における台湾研究」学会会議 報告**

(10月29日、30日 台北国家図書館 国際学会会議場)

羅福全亜東協会会長をはじめとする台湾側の強い熱意と、西川所長、石田理事長など日本側台湾研究者の積極的な参加で、運営委員会の翌日10月29、30の両日にわたってシンポジウムが行なわれました。

開会に先だち、教育部次長、羅会長に引き続いて池田交流協会台北所長が中国語で挨拶、日台双方が日台交流の促進とこのシンポジウムにかける強い期待がうかがわれました。シンポジウムは日

本に於ける台湾研究の第一人者が勢揃いした感があり、会員の皆様に是非参加頂きたい内容でした。またこの時期、淡江大学でも併行してシンポジウムが開催されており、西川所長、石田理事長、その他の先生方がそちらにも参加されました。

来年4月のシンポジウムは当方の総会の前日あたりになるかと思われますので、是非御参加下さい。

日	テーマ	講師	
29日	1970年代中華民国の福祉国家観 関西大学	司会	石田 浩(関西大学)
		スピーカー	今井孝司(白鳳女子短期大学)
		コメンテーター	関左篤樹(関西大学)
	冷戦期における米国の台湾政策と 非公式チャンネル 関西大学	司会	石田 浩(関西大学)
		スピーカー	前田直樹(広島大学)
		コメンテーター	滝田 豪(大阪国際大学)

	日本の台湾観 台湾の日本観 早稲田大学	司会 原 剛(早稲田大学) スピーカー 西川 潤(早稲田大学) コメンテーター 江正殷(早稲田大学)
	台湾経済史研究について 早稲田大学	司会 原 剛(早稲田大学) スピーカー ト( )+余照彦(国学院大学) 欠席の為 江正殷代講 コメンテーター 石田 浩(関西大学)
	七等生作品研究 東京大学	司会 垂水千恵(横浜国立大学) スピーカー 末岡麻衣子(東京大学) コメンテーター 山口 守(日本大学)
	鄭清文とその時代 東京大学	司会 藤井省三(東京大学) スピーカー 松崎寛子(東京大学) コメンテーター 張李琳(中央研究院) 張文薰(東京大学)
30 日	戦後日本の台湾史研究 - 社会史・経済史を中心に - 中京大学	司会 檜山幸夫(中京大学) スピーカー 松金公正(宇都宮大学) コメンテーター 栗原 純(東京女子大学)
	戦後日本の台湾史研究 - 社会史・経済史を中心に - 中京大学	司会 栗原 純(東京女子大学) スピーカー 川島 真(北海道大学) コメンテーター 檜山幸夫(中京大学)

## ）寒雲と共に「台北市立国楽団日本公演」

(10月7日 新宿文化センター)

李世昌代表処文化部長よりご案内を頂き、チケットを購入すべくチラシに記載されていた電話番号の一つに電話をしたところ、思いがけなく寒雲さんご自身が電話に出られてチケットをお手配頂くことになりました。公演は、台北市立国楽団の民族色溢れる演奏と寒雲さんの熱唱に感動しましたが、日台の交流に全身で打ち込んでおられる姿に心打たれる思いがいたしました。チケット購入のご縁で寒雲さんからのお手紙を頂きました。寒雲さんの日台交流にける真摯な心意気が読み取れるお手紙なので、抜粋ご紹介いたします。

「.....片道の人生ですから、もどることができないからこそ精一杯生きたい」と5、6年前からそう思うようになりました。そして日本で生きる台湾歌手としての自分に、きっと何かやるべきことがあるはずと考え始めました。この度もそんな思いで「台北市立国楽団」(70人編成)との日本巡回公演を企画しました。来年は日本の伝統文化を台湾で紹介するためのイベントも企画中です。こうした地道な文化交流ですが、近い将来きっと大きな成果が見えてくると信じています。個々で、皆様からのご支援を切にお願いいたします。どうかお誘いの上ご来場下さいます様心からお待ちしております.....」(寒雲さんの手紙から)



公演のフィナーレ。前列左の白いドレス姿が寒雲さん

## 講演会及び暑気払い 開催される

残暑厳しい8月31日(水)、「金美齡事務所 日台交流サロン」にて講演会と暑気払いが開催された。

第一部は、台湾観光協会の江所長から「最近の台湾観光事情」について講演を頂いた。本年は日本から台湾への渡航者数が順調に推移し、11月中には長年の念願であった訪台者数100万人突破の可能性が現実味をおびてきたことを受けて企画された、9月1日から12月31日までの4ヶ月間期間限定の「総額5000万円の豪華賞品が当たる！台湾へ行こう！キャンペーン」の内容が発表された。

台北及び高雄国際空港到着ロビーにある観光局ツーリストインフォメーションで、日本人旅客を対象にその場でスピードくじを引いてもらい、豪華賞品が当たるというものである。さらに100万人目の節目となる日本人には、特別の豪華賞品が授与される。奇しくも11月26日の台湾早稲田大学校友会総会頃が100万人目の可能性が高く、総会出席者の中から幸運の切符を引き当てる人が出るかも知れない。

第二部は、金美齡先生心づくしの台湾料理を囲んで暑気払いを開宴した。金先生が吟味した素晴らしい味とボリュームの台湾料理や台湾焼酎を全員が堪能した。各テーブルで親しく交歓が続くなか、ホストの金先生は各テーブルを回り一人一人とお話をす

(8月31日「金美齡事務所内 日台交流サロン」)

るなど、宴を大変盛り上げて頂いた。事務局の手抜きにより料理の写真を撮り忘れ、ここにご紹介できないのが大変残念。楽しい2時間があっという間に過ぎ、恒例の上野幹事の中締めにより終宴した。金先生及び台湾観光協会の講師を含め27名が出席する大盛会であった。(小野間記)



金美齡先生と

## 台湾NEWS

台湾にお住まいの、一色さんからの便りを紹介します。

### 『日本人墓地 その後』

台北の日本人歓楽街を背にして、南京東路と林森北路交差点に立つと、右に林森公園、左に康樂公園の緑が眼に入る。まだ歴史の短い公園だから鬱蒼たる木立の緑陰などは望むべくもないが、それでも青々とした芝生や、やや人工的ではあるが縦横に設けられた小路や泉水が、しばし憩いのひと時を提供してくれる。

この、繁華街の一等地にある公園は、今でこそ明るいモダンな雰囲気なたたえて周囲に溶け込んでいるが、7、8年前までは、表通りには洋服屋、鬘屋、靴屋、CD屋、餃子屋、軽食屋、雑貨店など、いわゆ

昭和39年商学部卒 一色 徹

る台湾の定番ともいえる個人商店が軒を連ね、その裏側はなにをすとも知らない人々の、住宅ともいえぬバラックがひしめき合っていた地域であった。

更に時をさかのぼって日本統治時代には、ここはこの地で最期を遂げた日本人の墓地であったのだ。数多くの日本人がここに葬られていたが、台湾第七代総督明石元二郎も、病を得て内地で倒れたものの、骨は台湾に埋めてくれという遺志により、遺骨はこの墓地に埋葬されたのであった。二つの公園を合わせると東京ドームよりも広いであろうから、往時は壮大な景観を呈していたことだろう。

敗戦後日本人が台湾を撤収するのと入れ替わりに、中国大陸から兵士を中心とする中国人がこの地に渡ってきたが、時が経ち軍隊から離れた人やその家族は、満身に政府から補償も与えられず、また大陸に帰るにも帰れない状態であったので、まず住むところを確保するために、市内の空き地にボロ家を建てていたが、街の中心地にあつて持ち主が日本に帰ってしまっていた墓地などは、格好の“宅地”であった。おまけに建物の土台となる固い石はおあつらえ向きに直方体で残っている。こうして墓石はバラックの土台や敷石になり、かつては線香の煙が絶えなかった日本人墓地は、外省人退役兵士などが住みつく貧民街に変貌したのだった。

このような、近代都市の恥部とも言うべき一角が市内にあることには、歴代の台北市政府も困惑し、何とか住民を移転させて清潔で明るい地域に再生させようと考えたのであろうが、外省人が多い国民党籍の市長が続いた台北市は、同じ外省人を追い出す政策をとるわけにはゆかず、バラックの取り壊しと住民の移転の実現は、民進党の陳水扁市長(現台湾総統)の出現まで待たなくてはならなかった。

当時私は、この地域のすぐ北側にあるマンションに住んでいたが、社用で日本に出張して3日後に戻ったところ、平屋のボロ家が密集していた地域が更地に一変して、その早業にびっくりしたことを憶えている。

マンションの窓から眺めると、住宅の痕跡はまったくなかった。一帯は塀で囲まれて立ち入り禁止になっていたが、何とか隙間を見つけて中に足を踏み入れてみた。整地はされていないので凸凹だらけだが、心配していたような遺骨の散乱は見られず、市当局が収集してくれたようであった。それでも、明石総督の墓所は見ると影もなく、広く大きな石造りの土台にはタイルを貼った跡が残り、傍らに大木が一本、荒れた墓所を守るかのように立っていた。すこし離れたところに鳥居が寂しく残っていたが、以前まだ住宅が密集していた頃にこの地域に入り込んだことがあって、その時総督墓所のもとおぼしき鳥居が一軒の家の柱と梁として使われていたのを見た記憶がある。残っていたのは、その柱と梁として使われていた鳥居であった。

敗戦によって手放され、退役兵士らによって打ち壊された墓地の廃墟のような無残な姿は、そこに葬られた故人と、やむなく墓を放置して帰国せざるを

得なかった遺族の無念さを宿しているように思えた。

たまたま自分は、この地域の取り壊し再生の時期に居合わせ、また隣接するマンションに住んでいるという縁がある。日本人として何かをしなければという漠然とした思いに駆られ、あたりを歩き回り、墓所や墓石のあとを探し回った。

それらの痕跡はほとんどなかったが、わずかに表面に名前を彫ってある石柱を2本見つけカメラに収めた。その後、日本の大新聞に、日本人墓地がたどった姿と再生工事の状況をしたためて読者投書欄に投稿し、石柱に彫られている名前に心当たりのある方には写真を送ると伝えて返事を待った。それが、自分が果たすべきせめてもの責任のように思えたからである。

しかし、その投書が掲載されることはなかった。

工事の際に収集された遺骨の多くは、誰のものともわからないまま、日本人篤志家達(稲門の方々もいたと聞く)の手で、別の場所に手厚く葬られたという。



林森公園寸景。右が戦前からある大木、中央やや下に明石総督記念碑が見える。

また、今でも林森公園の西北の一角に、明石総督の墓所を示すあの大きな大木が更に大きく枝を張っており、その根元に、日・中・英文で総督の生涯を簡単に記した石碑が埋められている。

台湾人から見れば支配者であった総督であるが、彼の台湾を思う心をよく理解し、記念碑を刻み残してくれているのである。

台湾人の懐の深さに、感謝せずにはいられない。

## お知らせ 一色徹さんがブログを公開しました

一色さんが満を持してのブログ公開です。会員の皆さま、是非ご覧下さい。

「私のブログのアドレスは下記の通りですが、投稿をサボってばかりなので恥ずかしいですね。」

<http://blog.goo.ne.jp/formosa36/>



「台湾50年代白色テロ受難者の話を聞く会」 に出席して

(9月24日 早稲田大学国際会議場・井深大記念ホール)

日台稲門会幹事長・石川台湾問題研究会代表  
昭和34年商研卒 石川公弘

台湾では昨年、ゴールデンアワーに「台湾百合」というテレビドラマが40回にわたって毎晩放映され、大きな反響を呼んだ。戦後の台湾を占領した蒋介石政権の、台湾人へのすさまじい弾圧を描いたものである。中国国民党による台湾人への政治的な弾圧は、長い間タブーとされてきたが、その実態が多くの受難者や人権活動家などによって、近年掘り起こされている。

元「台湾の政治犯を救う会」主催による「台湾白色テロ受難者の話を聞く会」が、2005年9月24日(土)13時から18時まで、早稲田大学国際会議場第三会議室で開催された。生憎の雨模様だったが、会場は満員の盛況だった。

主催者代表の三宅清子さんは、当時滞在していた台湾で、白色テロに苦悩する台湾人に長い間支援の手を差し伸べてきた日本人である。まずその三宅清子さんが、どういった経過でこの問題に取り組むようになったかを説明された。

続いて挨拶を求められた駐日台湾代表処の許代表は、自分より長い間の人権活動を評価され、世界人権賞を受賞した千恵夫人の方が、この会場に相応しいと夫人の登壇を求め、ご自分は千恵夫人の日本語を台湾語に通訳された。独立運動に生涯を捧げられているお二人らしい姿だった。

その千恵夫人は、台湾の政治犯の救援に尽力した三宅清子さんの功績を称え、「先日、愛・地球博でシベリアの凍土の中にいたマンモスを見たが、つい十数年前まで台湾もシベリアの凍土のようであった。いまは民主化されて、自由な大地になった。今まで私たちは世界の人から救援の手を差し伸べられていたが、今は世界の虐げられている人々に、援助の手を差し伸べている」と話された。

その後、テレビドラマの要点が、会場で放映され、その「台湾百合」のモデルとなった陳勤女史も講演された。彼女は1950年、国民小学校の教員をしていたとき、身に覚えの無い罪状で逮捕され、新婚49日目であったが、5年の刑に処せられた。獄中で妊娠を知り、子供の命を守るためあらゆる苦難に耐え、獄中で出産、育児もした。今は五人の子を持つ幸せな母親だ。

次が台湾紀行に老台北として登場する蔡焜燦氏の実弟・蔡焜霖氏である。蔡焜霖氏は昭和5年生まれ、台北一中在学中、動員されて塹壕掘りをしていたとき、部隊長から敗戦を知らされた。敗戦後は学校へ戻ったが、読書ばかりしている学生だった。そんな蔡さんを、先生が読書会

へ誘った。

高校を卒業するとき、兄は大学へ進学するよう勧めてくれたが、和洋雑貨店を裕福に営んでいた実家も、戦後のインフレで芳しくなかったの、役所勤めをすることにした。ある日のこと、役所へやってきた中国人に警察へ連行され、それから10年間、家へ帰ることはできなかった。たまたま警察で給仕をしていた知人の通報で、家族の知るところとなった。次兄の蔡焜燦氏も駆けつけてくれ、留置場の塀の外から、大声で「焜霖、焜霖」と呼び続けてくれたのを、今も覚えている。

台北の軍法処で懲役10年の判決を受けた。理由は高校のときの読書会参加であった。全くの無実である。放り込まれた刑務所が、またひどいところであった。3坪くらいの部屋に30人から40人が押し込まれ、寝るときはちょうど鰯の缶詰のように折り重なって寝た。部屋の隅に便器がある。新入りはその便器の側で寝なければならない。ひっかけられるので、ハンカチで顔を覆って寝た。

恐ろしいのは明け方である。全員が獄官の靴音で眼を覚ます。その日の処刑者が全身を荒縄で縛られ、足かせをはめられて、処刑場へ連れて行かれるのである。台湾紀行の「幌馬車の歌」で送った鐘校長も、その一人だった。中でも、劉という18歳の青年の処刑の朝のことが、忘れられない。彼の顔面は蒼白だったが、獄中の仲間一人ひとりと手を握り、「お世話になりました。皆様お身体を大切にしてください」と挨拶し、毅然として引かれていった。

10年のうち、台北に8ヶ月、緑島に9年6ヶ月いた。いろいろ勉強になった。いま思うとあれが私の大学教育であった。一緒に居た政治犯とは、互いに助け合った。石を砕いて自分たちを閉じ込める塀を作るなど、労働はきつかったが大自然の中で、軍歌などを歌って自らを励まし、生き抜いてきた。」

最後にTVドラマ「台湾百合」の製作にたずさわった陳建城氏が講演した。元は新聞社の記者だったが、228事件などの取材を重ねるうち、これを記録映画として残すことを決意したという。調査の過程で知った多くの過酷な物語を話してくれたが、一番印象的だったのは、日本ではとかく美談気味に伝えられている恐怖政治の元凶・蒋介石の残虐さであった。実態は大いに違っていたらしい。死刑囚の生前の写真と、処刑後の惨たらしい写真とを両方自分で見比べて、処刑されたのを確認したというのである。

早稲田大学台湾研究所で研鑽を積まれている、留学生の紀さんから投稿して頂きました。

## 伝統の地から近代の中継地へ 早稲田での「巡礼」

アジア太平洋研究科博士課程D3 紀 旭峰

約4年間、京都立命館大学で送った学部生活に終止符を打ち、早稲田大学での新たな学問との出会いに期待して、僕の留学の旅は「上洛」から「上京」へと変わっていった。

日本の伝統を自らの肌で実感したかったという理由もあって、最初の留学先を、千年以上の歴史を誇る京都の大学に決めた。そして、立命館衣笠キャンパスで人間文化について学ぶ日々、勉学の合間にはキャンパス周辺の仁和寺や金閣寺など、京都を代表するお寺に出かけ、境内で小説を読んだり、瞑想したりした。このような立命館での様々な出会いによって、日本の伝統文化を感受するための土壌を培うことができたといえるだろう。

しかし、日本の近代に対して興味を持つようになると、明治期以降、西洋近代の技術や思想をより効率的に摂取した中継地としての東京に行き、日本の近代そのものを研究したいと思うようになってきた。そこで、東京の各大学の歴史を調べたところ、日本の近代化、とりわけ、学生の思想啓蒙の分野において、早稲田大学が非常に重要な位置を占めていたことがわかった。そして、早稲田に対し、ある種の崇拜に近い感情が生まれた。そこで、早稲田大学の大学院を受験したところ、運よく合格したのである。こうして、僕の早稲田への「巡礼」の旅がはじまったわけだ。

振り返ってみれば、早稲田のシンボルとして広く知られる大隈講堂の時計台を眺めながら、西早稲田キャンパスに通学する留学生生活はあっという間に、6年目を迎えようとしている。けれど、早稲田での勉学は必ずしも順調とはいえない。しかし、早稲田という空間に居られるだけで、僕の関心分野の大山郁夫や山川均など、近代日本における思想啓蒙の歴史的展開過程の上で重要な人物に出会うことができることを思えば、もう言葉で言い尽くせないほど感無量である。そして、なんといっても、早稲田大学図書館の蔵書の膨大さに圧倒されたことが最も印象深かった。とくに、大正期日本の知識人社会史を専攻する僕にとって早稲田大学図書館とは、近代日本とどう向き合うかという課題を解明するために、たくさんの材料を提供してくれる宝庫でもある。

早稲田の在野精神は、何かに打ちのめされたときに僕を支えてくれるひとつの力になると同時に、常に「周辺」から、批判的な眼差しで、権力メカニズムや社会構造などを見つめなければならないと自分を戒めてくれる力でもある。強いて例えるならば、京都の立命館大学が、日本の伝統を吸収していた頃の僕をずっと温かく見守ってくれた「母」のような存在ならば、思想啓蒙と主体性の探求において、早稲田大学は僕を導いてくれる、いわば「父」のような存在だと言っても過言ではないだろう。

## 台湾人ビザ免除恒久化喜ぶ

昭和42年商学部卒 小林重雄

7月27日付産経新聞によると、台湾人の観光客に対する訪日ビザ免除の恒久化が実現する見通しになったという。これは日本が久々に行う快挙だと思う。

1970年代と80年台に仕事の関係で約10年、台湾に住んでいたが、先日、台湾の知人の娘さん夫婦が新婚旅行で日本へ来た。新郎新婦とも日本語は全く話せないが、双方の両親から日本を見るように勧められたといい、東京の名所などを案内した。特に新婦は実父から、「日本は信頼できる国だから、日本語が話せなくとも事故や事件に遭うことはない」と言われたという。

台湾に居住していた日本人の一人として、台湾には日本人を好意的に見てくれる新婦の父親のような人々が多いことを思いだして、ありがたいことだと感じた。

日本は先進国となったが、客観的に日本を理解できる外国は意外に少ない。そんな中で台湾には、日本の長所も短所も偏見なく知る人が多い。日本語が流暢に話せる世代が少なくなる中、親日的な人がこれから減っていくのではという心配もあったが、台湾人観光客のビザ免除で日台交流が促進され、客観的に日本を知る真の友人が増えていくと確信し喜ぶたい。

(この文章は去る8月3日、産経新聞「談話室」に掲載されたものを、ご本人の許可を頂いた上で転載したものです。)

## 会員動向

### ）訃報

谷中久勝氏(昭和40年・商学部卒)が、去る平成17年10月22日に逝去されました(享年64)。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### ）平成17年入会の方々のご紹介 その2 (12/20現在)

市川 智さん(昭和50年商学部卒 東邦物産(株)勤務)、五十嵐 亨さん(昭和45年教育学部社会学科卒 株エアコム勤務)、以上2名の方々が新規に入会され、今年の入会者は合計12名となりました。

## 母校NEWS

### ）早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 企画展示

現代演劇シリーズ 企画展「ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー 1961 2005」(入場無料)

会期：2005年9月26日(月)～2006年2月4日(土)

「日英交流 大坂歌舞伎展 - 上方役者絵と都市文化 - 」(平成17年度芸術拠点形成事業)

会期：2005年12月1日(木)～2006年1月20日(金)

関連演劇講座「美術史から見た役者絵」

日時：2006年1月20日(金) 14:40～16:10

会場：早稲田大学小野記念講堂

### ）早稲田スポーツ

#### 野球部

ドラフト速報 ヤクルト 希望入団枠 武内晋一(人科4年・智弁和歌山高)

巨人 4位指名 越智大祐(人科4年・新田高)

#### ア式蹴球部

関東大学サッカーリーグ二部 早稲田 4 1 慶應義塾 リーグ優勝 9年ぶりの1部昇格が決定！！

#### ラグビー蹴球部

関東大学ラグビー対抗戦 5連覇を達成！

## 会合予告

### ）講演会及び新年会 開催間近！！

日時：平成18年1月25日(水)

講演会 午後5時30分～ 新年会 午後6時30分～8時30分

場所：茅場町)「日本橋 稲ぎく」 [URL:http://www.inagiku.co.jp](http://www.inagiku.co.jp)

東京都中央区日本橋茅場町2-9-12 電話：03 3669 5677 Fax：03-3669-5678

地下鉄東西線・日比谷線「茅場町」駅 6番出口徒歩1分

講演：「伝統の地から近代の中継地へ～早稲田での巡礼～」

講師：紀旭峰さん(アジア太平洋研究科博士課程)

会費：7000円

### ）第10回日台稲門会総会、及び第7回日台稲門会交流の集いのご案内

日時：平成18年4月22日(土)・総会 午後3時～・記念講演 午後4時～・日台交流の集い 午後5時～

場所：総会及び記念講演会 日本記者クラブ 大ホール(プレスセンター10階)

日台交流の集い レストラン・アラスカ(プレスセンター10階)

記念講演スピーカー(予定)：野村徹さん・早稲田大学体育会野球部前監督(昭和36年政経卒)

）台湾関連書籍紹介

『台湾監獄島』 柯旗化著 第一出版社(台湾・高雄)刊

1929(昭和4)年台湾左營生まれの著者が、大東亜戦争終戦後、中華民国としてやってきた中国国民党独裁体制下の台湾で、思想犯として囚われた17年間の獄中体験を描いたもの。中学校教員であった柯氏が、1951年に反乱罪容疑で逮捕され、離島・緑島(別名・火烧島)の刑務所などに収監された体験が軸になっています。台湾全島を「監獄」に見立て、国民党独裁体制下の社会が台湾民衆の力で次第に民主化され現在に至った様子がよくわかる作品です。

「台湾監獄島」は1992年に日本の出版社から日本語で出版されました。時あたかも中華民国初の台湾人総統・李登輝氏の時代で、台湾民主化の象徴とも言われましたが、その後増刷されないまま柯氏が2002年に死去。今回の日本語版復刻は、大阪在住の会社役員(台湾出身)が「台湾監獄島」を多くの台湾の日本語世代や日本人に読んでもらいたい、という思いから自費出版を決意されたものだそうです。

同様のテーマでは、岩波書店同時代ライブラリーから93年に出版された楊威理著「ある台湾知識人の

悲劇 - 中国と日本のはざままで 葉盛吉伝 - 」がありますが何故か品切・重版未定という状況で、「台湾監獄島」は現在第一級の資料といえます。

\*「台湾監獄島」は非売品で、千葉建国塾さんから希望者に無料で配布されています(送料は申込者負担)。申し込み方法は次の通り。

柯旗化著「台湾監獄島」を申し込む旨明記し、申込み年月日、氏名(フリガナ)、郵便番号、住所、電話番号、Fax番号、Mail、(以下任意)職業、所属団体等、役職、を記入の上、

80円切手4枚を同封し、

〒264-0021 千葉県千葉市若葉区若松町531-263 千葉建国塾事務局 福村 良治様、までお送り下さい。詳しくは、

<http://petat.com/users/myoukou/chibakenkoku-index.html> をご覧下さい。

）台日経済貿易発展基金会董事・常任特別顧問・台日商務協議会秘書長の李上甲氏が「旭日小綬章」を受賞されました

李上甲さん、おめでとう御座います。2005年秋の叙勲で日本・台湾間の経済交流促進に寄与した功労に対して、旭日小綬章が授与されました。

代表処朱文清文化部長によれば、台湾人受賞者は台湾セメント会長(当時)辜振甫さん(勲一等瑞宝章・藍綬褒章)、楊慶安さん(勲三等瑞宝章)、東吳大学客員教授・蔡茂豊さん(旭日中綬章)に次いで4

人目ではないかと思うが確認していないとのことでした。

ご承知のように李上甲さんは、一昨年の「日台稲門会総会」に謝南強会長に同道してお見えになり、来賓として流暢な日本語で挨拶も頂いています。(白鳥記)

編集後記

日台稲門会ニュースレターが諸先輩方の努力により発行されて以来、今号で早や9号を重ねることができました。これも偏に会員の皆様のご支援の賜物と深謝する次第です。ただ編集子の野放図な方針のせいから昨年あたりからボリュームが増え、総体的に目鼻のはっきりしない編集になってしまいました。しかし考えてみると、ニュースレターの使命が年1回発行の会報ではできないリアルタイムに近い情報の発信にあるならば、ボリュームが多いのは発信すべき情報が多いということ、情報が多いのはそれだけ日台稲門会の活動が活発だから、と言い訳することもできます。ともあれ会報にせよニュースレターにせよ、今の台湾と我々ががかかわった記録を伝え残してゆく、という主旨は守って編集にあたっています。

さて来年の春節は1月29日(日)です。ですから台湾通の皆さんご存知の通り、1月28日までは酉年なんです。また閏年にあたり、7月が2回あります(閏7月)。

それでは皆様、どうぞ良い年をお迎え下さい。(齋藤)